

茶道で学んだ思いやりの心

広東外語外貿大学三年（中国）

李炎春

今年三月に、私は初めて茶道の授業を受けました。コロナ禍と共存しなければならぬ特別な時期ですが、茶道の授業を通して、久々に人と人とのつながりを感じる事ができました。

最初私は茶道が堅苦しいと思いました。一服のお茶を点てるのにたくさんの手順が必要で、その作法が美しく思いましたが、やはり規則がややこしいと感じました。しかし、週に一回の稽古をするうちに、そんなややこしい作法に、私は人々に対する「思いやり」を感じられるようになりました。

私は亭主を務めたことがあります。初めて亭主としてお茶を点てる時に、動作の意味を深く考えず、ただお点前の手順を覚えるだけで精一杯で、これ以上のことを考えると脳がフリーズしてしまうと感じました。どうやらこれは形だけの茶道で、本物の茶道ではないと思いました。しかし、

稽古を重ね、体が作法を覚えるようになると、私の考え方も変わりました。お茶を点てるときに、「次の手順」だけを考えるのではなく、「どうやって相手を楽しませられるか」も考えるようになりました。客だって、足のしびれに耐えながら亭主のお点前を待っています。ですから、亭主の私はこれらの作法を通して自分の気持ちを相手に込め、客が心地よくお茶を楽しむように頑張らなければなりません。もし自分の気持ち相手に届き、客に喜んでいただけたら、私にとっても幸せです。このように考えると、茶道の作法もルールではなく、相手を思う心から出た自然な動きになりました。

相手を思いやるという茶道の考え方は、茶室だけでなく、日常生活にも通じるものだと思います。仕事から帰ってきたお父さんに「お帰り」と声をかけたり、家事で忙しいお母さんを手伝ったりして、小さなことに見えるかもしれないが、家族への思いやりの現れです。また、授業に教科書を忘れて困る子に本を差し出すとか、乗り物で高齢者や体に障害を持つ人に席を譲るとか、このような周りの人を思いやる気持ちも大切にすべきだと私は思います。

今の世界では、コロナウイルスの感染はまだ拡大し続けます。こんな状況の中、この思いやり精神は求められます。基本的なことである、公共スペースでソーシャルディスタンスを保ち、マスクを着用し、よくアルコール消毒をする

よう心掛けることは、「感染しない」だけでなく、「感染させない」という大切な思いが込められています。皆さんには思いやりの行動をとれる人になってほしいと願います。

個人は思いやりがあれば、それは国をも越えます。二〇二〇年、中国がコロナで一番困難な時期に、日本はマスクなどの医療物資を送り、武漢を支援しました。これは日本から届く思いやりだと思います。「山川異域・風月同天」、文化も歴史も違う国ですが、災害に直面するときに偏見を捨て、お互いに助け合います。茶道の「一盃からピースフルネスを」という精神をもとにこれからも、中日両国は引き続き尊重し合い、平和を求め、そしていろんな困難を乗り越えるよう私は心から願います。

「思いやり」という言葉はよく耳にしましたが、茶道の稽古をして初めて、身近にこの精神を感じることができました。今はコロナ禍で大変な時期で、人と人の距離感を感じざるを得ません。茶室でゆっくりと相手のことを思う時間はなかなか取れません。しかし、今こそ、人に対する思いやりが重要です。一つ一つ小さなことかもしれませんが、塵も積もれば山となる。その小さな積み重ねも大きな力になります。これからも茶道の稽古で学んだ思いやりの心により多くの人に伝えていきたいと私は思います。